

親子の共同発達として捉えた 子どもの自己制御機能 (10)

— 2 歳台の子どもにおける自己主張・自己抑制の共通性と相違 —

○竹尾和子 (東京理科大学)
高橋 登 (大阪教育大学)

渡辺忠温 (東京理科大学)
渡部朗代 (白百合女子大学大学院)

キーワード：自己制御機能

目 的

本研究の目的は、2 歳台の幼児が 5 歳になるまでの期間における幼児とその母親を対象にした縦断調査 (インタビュー・実験) の結果に基づき、「親子の共同発達過程の一側面」として捉えうる幼児の自己制御を明らかにすることである (竹尾・渡辺・渡部, 2015)。本発表では、幼児の 2 歳時のインタビュー調査で母親により語られた子どもの行動について、前稿 (9) で検討された自己主張の多様性を踏まえ、自己主張と自己抑制との差異および共通性を検討する。

方 法

(詳細は次稿 (11) を参照。)

【調査対象者】7 組の子ども (男児 4, 女児 3) とその母親。

【調査方法】1.5 ヶ月に 1 回のペースで実施した縦断調査のうち、本発表では、対象児が 2 歳 0 ヶ月前後から 2 歳 11 ヶ月にいたるまでの期間のインタビューデータの分析結果について報告する。

【分析方法】本発表では、インタビューにおける母親による語りから抽出された 6 つの分析テーマの 1 つ、「子どもの行動」について、「上位カテゴリー」および「語りの側面」に焦点を当て、検討

と考察を行う。

結 果

【自己抑制の多様性】本研究では 2 歳台の自己抑制として 8 つの上位カテゴリーが抽出され、従来の抑制の自己抑制の捉え方では扱われることなかった実に多様な自己抑制が見出された。

【自己抑制の自己主張との差異】「語りの側面」に注目した場合、自己主張における「自己主張の手段」に相当する「自己抑制の手段」というものが、自己抑制には見られなかった。自己主張の発達を捉えるにあたって、意図の表出の手段としての言語や動作などの喪失や獲得がその関連要因になりうるが、自己抑制の発達においては、異なる関連要因が存在すると考えられる。

【自己抑制の自己主張との共通性】自己抑制の「語りの側面」である「自律性・自主性の存在」「調整傾向の存在」「周囲への配慮の存在」には子どもの側の主体性が介在していると考えられる。この子どもの側の主体性は母親の子どもの自己主張・自己抑制理解の共通の視点として捉えられよう。

(本研究は科学研究費補助金 (課題番号 21730527) を受けて行われた。)

表 子どもの自己抑制的行動についての話題数

語りの側面	上位カテゴリー	定義	計
親の意図への 従順さの存在	親の意図を優先した行動抑制	親の意図や指示に従順に従っている場合。	28
自律性・自主性 の存在	自律的行動	自主的に好ましい行動を行っている場合。	12
自己主張の不在	自己主張のなさ	何らかの行動について言及するというよりも、母親が特定の自己主張的行動が「ない」ことについて自己抑制的なものとして語っている場合。	5
	周囲の人を利用した行動	自己主張的行動のひとつである「主体的行動へのこだわり」がないことについて語られている場合。	1
調整傾向の存在	自己主張の程度の調整	自己主張をしているものの、その過程で主張に抑制をかけていることがうかがえる場合。	3
	ひそかに自己主張する・お おびらに自己主張しない	直接的に面と向かって自己主張するのではなく、つぶやきのような形で自己主張している場合。	1
周囲への 配慮の存在	他者の意図・気持ちに配慮し た行動抑制	抑制している目的が他者の意図や気持ちに配慮したものである場合。	2
	場面に配慮した行動抑制	抑制している目的がその場面や場面にいる他者への配慮してものである場合。	1